サトルボディについて

—女性と身体性の観点から—

山　口　素　子

はじめに

本特集のテーマとして「こころとからだの〈間〉」という題を与えられたが、このテーマを考える上で分析心理学者ユングが考えた「サトルボディ（Subtle Body）」という概念を取り上げてみたい。「サトルボディ」は微細体、精妙体、気息体などと訳されているが、「見えない身体」、「イメージとしての身体」といわれ、心と身体の「中間領域」を示すものと考えられているからである。ただしこの場合「中間」というのは単に心と身体の間にある、もしくは重なり合った部分というのではなく、その両者を超えた第三の領域、心と身体の背後に存在する領域であると考えられている。老松（2001）はこの概念が、ヨーガで言う上位の領域—原因身と粗大な領域—粗大身の中間にある「微細身」や、仏教における法身と応身の中間的性質を持つ半人格的、半身体的、半抽象的な「法身」という概念に近いことを指摘している。また精神分析学者ウィニコットは外的な体験の源にもなり内的な経験の源にもなる時空を「中間領域」、「第３の領域」と呼んだが、この概念とサトルボディとの共通性についても言及されている[1)]。

この「サトルボディ」という概念を理解する上で、「類心的無意識（Psychoid Unconscious）」という考えが役に立つ。ユングは人間の意識、無意識を考える上で無意識の中に個人的無意識と集合的無意識という２つの層を想定した。前者が、フロイトのいう無意識、すなわち抑圧された、もしくは忘却された、

個人的体験の貯蔵庫であるのに対し、後者は個人的な経験とは異なり、人類により共通した、より客観的な心の活動の場であり、系統発生的、本能的な人類の基底と直截的に関わるものと考えた。この場合、Stevens（1982）は、「身体はあらゆる人に共通するので、一般的に言えば集合的無意識の場とみなすことができる」と述べている[2)]。ユングの考えによれば、人間の無意識は比較的上層にあるとされる個人的な無意識から、より人類に共通した集合的な無意識へと深まっていく。さらにそれを超えると、心理的な世界と生理的な世界の区別がつかないような世界に達する。この心の世界から出発しながらすでに心の世界とはいえない、「心のような」世界を「類心的」無意識とユングは名づけた。

類心的無意識は人間の意識から最も遠く、全く接近不可能な無意識のレベル、もしくは無意識におけるレベルをさし、本能的系統発生的レベルに達するため、このレベルでは無意識は有機的世界との共通の属性を持つに至る。類心的レベルは中立的な性格を持ち、完全に心理的ともいえず、また生理的ともいえない。つまり、そこでは心理的な世界（心）と生理的な世界（身体）は一つの現実の別々の側面に過ぎず、ただ異なる枠組みを通して眺められたものであると考えられる。

ユングは、「精神的でない性質を持って顕現するものの中に、精神的性質が潜在している」ことを信じる十分な根拠があることを主張している[3)]。また「身体は心の物質的実体の現れである可能性がある」とも述べている[4)]。類心的無意識のレベルでは、心と身体は対立するものではなく、因果論的に、どちらが原因でどちらが結果であるという形態をもとらない。心と体は両者共通の中間領域を持ち、その根本となる現実―「サトルボディ」―の諸相、異なった現われであると考えられる。

逆に言えば、この心と身体の背後にあるサトルボディは直接見えないものであり、直接触れることもできない。私達は心というチャンネルを通して、あるいは身体というチャンネルを通して、サトルボディの存在を感じ取ることができる。心と体の中間領域は生と死の中間領域でもあるからである。

ところで、心理療法家として女性のクライエントの方々と接していると、その人の抱える問題の中に身体の問題が分かちがたく結びついていることが多いことに気づかされる。多くの女性が身体というチャンネルを通して、その背後にあるサトルボディへと近づいていく、あるいは近づかざるを得ない状況をしばしば目にする。後に詳しく述べるが、月経、妊娠、出産といった女性に特有の身体的な変化は、ただ身体的変化に留まることなく、女性の心理に肯定的にも否定的にも大きな影響を与える。そしてそれは時に宗教的な体験ともいえるほどの深さに達することもある。サトルボディの世界では、身体の変化は、共時的に心の変化としても表れる。つまり身体の変化は、同時に心の変化であり、というよりもむしろサトルボディにおける変化が、身体を通して現れているため、心もまた否応なくその変化を生きなくてはならなくなる。そのため心の変化は非常に根源的な色合いを持つ。このような身体からの半ば強烈ないざないは、もちろん身体を持つ存在として男性、女性の両方に起こりうるものであるが、女性と身体性との結びつきから考えて、女性のほうが身体の側からのこのサトルボディへの接近にさらされる機会が多いのではないかと考えられるのである。そこで本論文では、女性と身体性の観点からサトルボディについて論じてみたい。

1．女性と身体性

「女性」というテーマは様々な切り口から語られてきたが、その中でも身体性との結びつきはしばしば指摘されてきた。この場合女性は男性の性的欲求を喚起するという性的な側面から身体性と結びつけられ、またそれと関連もしているが、子供を生み出す母性として身体性と結びつけられることが多いように思われる。

性的な側面からの女性と身体性との関連については、Harding（1971）は以下のように述べている[5)]。すなわち、月経期間中の女性達は、未開の時代においてはほとんど世界的にタブー視されており、この期間女達は隔離され一人で

いなければならなかった。これは月経が、動物の発情と等価であると考えられてきたからであり、未開の人々にとって彼らの文化的進化がなされるために、何らかの人間的徳を発達させ、動物的本能の完全な支配から自らを解放するためには、彼らの欲望をかき立てることのできる何物かは「邪悪」と考えられなければならなかったのではないかというのである。

つまり、文明化の過程において、精神と身体が分裂し、分裂した精神にとって身体は、危険で邪悪なもの、抑圧されなければならないものとなった。そしてこの危険で不都合なものは、男性にとってその身体的、性的欲求を喚起する存在であり、「他者」である女性に投影されたということである。

しかしこうした意味からのみ言えば、逆に女性の精神にとっては男性が身体性を喚起するものであるともいえる。小倉（1988）は、「女性の場合も、なにごとか神聖で集中力を要する仕事をなさねばならないとされる時は、男性の存在は邪魔なのだ」と述べている[6)]。小倉はジャンヌ・ダルクが処女であったといわれていること、修道女や巫女が処女でなくてはならないことに対して、そこには異性が持っている危険な肉体的引力を排除しておこうとする動機が隠されており、彼女達にとっては「男性は汚らわしい」のだと述べている。

同じような心身の二元論に立てば、女性の精神にとっては男性が身体ととらえられるという結論が当然導かれるが、この観点はしばしば見落とされがちであり、女性＝身体という図式が定式としてまかり通り、女性は身体としてその穢れと邪悪性を引き受けることを強いられてきたといえるだろう。

しかしこの身体の性的側面をよく考えてみれば、性に関わる身体性が必ずしも穢れや悪だけとは言い切れないことが分かる。性的行動は一義的には子供をもたらすための生殖行為であり、そもそもこの事自体が必ずしも動物的であり＝悪であるという種類のものではないが、さらに、人間は歴史上、性に単に身体的生殖行為以上の意味を付加してきた。

性にまつわる強烈なエネルギーやエクスタシーは単に身体的興奮に留まらず、心やそれに関わる人間存在全てをも巻き込むものである。インド文化圏の

宗教に見られるように、多くの宗教において、男神と女神の結合は宗教的に大きな意味を持ち、性は象徴として取り扱われている。そこでは実際の男女の結合が新しい生命を生み出すように、対立物の統合の中から最高の創造性が生み出される。この様に性は身体的である一方で極めて精神的な営みでもあり、心と身体の両方を含むもの、というよりも心と身体の中間領域にあるもの、つまりサトルボディと深い関わりのあるものであるといえよう。

中世ヨーロッパで盛んに行われた錬金術においても、互いに似ていないものの結合、対立するものの結合が重要視された。それは一見、金という物質を求めるものでありながら、同時に極めて精神的な作業であったとされており、彼らは様々な作業を行いながら、霊的にして、深く激しい体験を味わっていたといわれている[7)]。

性的結合のイメージは個人の心の中でも深い象徴として体験される。そこでは結合する男女はそれぞれの心の中で最も異質なものとして未だに統合されていない心の様々な要素を表している。性交のイメージはその統合を象徴し、新しい生命は心の変容と再生を象徴している。

この様に性はそれにまつわる強烈なエネルギーと変容と創造の可能性に満ち満ちてはいるが、このエネルギーとその結果が常に肯定的な結果を生むとは限らない。歓喜と法悦の後ろには恐怖と狂気とが存在し、変容と再生には常に破壊と死が背中合わせに存在している。性に含まれるこうした極度の二面性ゆえに人は性を一方では宗教的なものとしてあがめ、一方では恐れ忌むべきものとしたのであろう。

性のこうした側面を考えると、女性は身体を押しつけられたものとして否定的にのみ生きてきたのではなく、サトルボディへの入り口として身体を生き、その事を通して精神的にも深く生きるという道をも歩んで来たのではないかと思われる。もちろんサトルボディもまた一面的に肯定的なものではなく、一方で死をもたらすもの、あるいは死そのものでもあり、安易に近づくべきではないことは言うまでもなく、そこに女性の生き方の困難さも潜んでいるとは思う

のだが。

さて次に性的身体とも関わってはくるが、母性における身体性について考えてみたい。一般に「母なるもの」のイメージは母体としての女性の身体に基礎を置いていることが多い。子供を宿し育む子宮、生まれた子供に乳を与える乳房、子供を抱きとめる腕や膝、肌のぬくもりなど、母のイメージは身体的イメージと強く結びついている。そして母は、自らの身体のうちに、身体を持つ存在としての子供を宿し、育み、生み出すという点で、実際に深く身体と関わっており、母である女性は自分の身体性と向き合うことになる。

Demetrakopoulos（1983）は、出産は女性にとって自分の個を超える体験であると述べている[8)]。母親は出産を自分の個性の枠を超えた「限りない存在」、「限りない恵み」との「深い一体感」として体験し、同時に死を体験する。そして、誕生、死、再生の秘密に関わることは、身体の有限性に触れることになり、その体験は逆説的に身体の有限性を通して現れる無限性に触れることになると述べ、それを「下に向かっての超越」という言葉で表現している。また女性は授乳によって、自分の魂の神秘な層、さらに存在の根源に関わる層を体験できるとも述べている。ここで述べられている層がサトルボディとほぼ同義であることが分かるであろう。もちろんこれらの体験は、今まで述べてきたように、重要な変容体験になることもあれば、逆に離反や阻害をもたらす否定的な体験になることもあるが、母性の体験がまた、女性の心の発展に大きな意味を持つことが考えられる。

先述したように、男女にかかわらず人間は全て身体を持って存在しており、その存在の底には死すべき有限性を持つ身体というものが深く関わっている。宗教家は身体性を避けては通れぬであろうし、また身体に障害を抱える人々にとって、身体性はかなりの比重で大きな問題であると考えられる。男性にとっても性は女性と同様に重みのあるものであろう。そうした中で、「母」という存在もまた大きく身体性と結びつき、その意味を付加されている。性的な側面に加え、こうした面から、これまで女性は身体性と強く結びつけられてきたと

いうことができ、多くの女性にとって、好むと好まざるにかかわりなく身体そしてその背後にあるサトルボディが人生に大きく関わってくるといえるかもしれない。

2．女性と心身症

先にも述べたように、自身の中に生じる性的欲求、身体生理的欲求を、自身の存在のうちにとらえず、それらを引き起こす身体を異物として認識し、さらにそれを他者である異性に投影するという機制が働いている場合、そこでは精神と身体は分裂し、身体は精神と身体という二元論の中でとらえられている。こうした二元論においては、自我は精神と同一視され、身体は自我に同一視された精神が所有し、道具として使用したり支配したりするもの、あるいは逆にそれに抵抗したり悩ませるものとしてとらえられる。この場合身体は、生理学者の対象となる解剖学的な意味での身体、あるいは客体としての身体、空っぽの物体としての身体という意味合いを持つ。こうした二元論は近代の西洋文化において特に突出して特徴的であり、近代医学もまた、この心と身体を分けて考える二元論を基礎において発展してきたといわれている。ところが最近よく話題になる心身症は身体と心とにまたがる病気であり、こうした二元論ではとらえられないものとされる。

心身医学者池見（1963）は、「もともと心の影響を受けない病気は一つもなく、そういう意味では全ての病気が心身症だとも言える」とも言っているが[9]、心身医学の対象となるものとして、日本心身医学会（1970）は心身症を以下のように定義している[10]。すなわち心身症とは「身体症状を主とするが、その診断や治療に心理的因子についての配慮が特に重要な意味を持つ病態」、また「身体的原因によって発症した疾患でも、その経過に心理的な因子が重要な役割を演じている症例や、一般に神経症とされているものであっても、身体症状を主とする症例は、広義の心身症として扱ったほうが好都合のこともある」。この定義の仕方は基本的には身体と心の症状を分けて考えるという二元論的な観点

から出発しており、その上で、心身症はまず身体の症状があることが前提とされる。しかし身体症状を主とする神経症と、狭義の心身症とを区別することは困難なことがある。それらは身体因子と心理因子のどちらがより関与しているかとか、身体病変が機能的な働き上だけのことか、それとも器質的な損傷まで起こっているかなどを考慮して判定するとされるが、実際には両者を明確に区分する線はなく、この領域において心と体が明確に二つに分けられるようなものではないことが浮かび上がってくる。

こうしてみると、心身症は、身体が精神に対する単なる物体としてではなく、生きている身体、私達が実際に生きている具体的身体としてとらえられる必要があること、心と身体というものが一体何であるのかをもう一度考え直す必要があることを示していると思われる。

心身症における心と身体について考えるとき、心が原因で身体のほうが結果であるとか、あるいはその逆といったように、そこに短絡的因果関係を認めるべきではないと河合（1986）は指摘している[11]。河合は心と身体はどちらもファクターであるとし、それは心と体の基盤となっているものとしてのより高次な実在があることを意味しているのではないかと述べている。そしてその高次な実在は心身の両者を超える性質のものであり、心身症はこの高次の実在の状態が普通でないために、心にも身体にもそれが反映されているのではないかと考えている。ここでは心と身体は対立するものではなく、共により高次な実在を反映するファクターととらえられている。河合はこのより高次な存在を「たましい」と呼んでいるが、この概念もまたサトルボディに近似している。つまり心身症は、心が原因で身体に異常が起きるとか、あるいは身体が原因で心の調子がおかしくなるのではなく、その背後にあるサトルボディの問題が、心と身体の両方を通して現れていると考えられるのである。

また河野（1984）は、心身症などで薬を使用してもよくならないとき、自然治癒力（ホメオスターシス）が阻害されているのではないかと考えると述べている[12]。また心身症の治療のとき、自分であれこれ本を読んで自己流の試みな

どを行い、かえって自然治癒力を壊してしまうことがあるとも述べている。もちろんこれは心身症に治療の必要がないということではないが、ここでいう自然治癒力における自然という概念も、心と身体を超えたものを想定していると思われる。

もともと女性は、母性としての出産や授乳以外にも、初潮、月経、閉経など一生を通じて、絶えず内分泌系の変動にさらされており、しばしばこれらの身体の変動は肯定的な心を深める体験としてばかりではなく、あるいはその様な体験となる前に、さまざまな心身症、精神障害を引き起こすことにもなる[13)14)]。たとえばまず思春期に見られる症候としては、摂食障害や無月経、月経前緊張症、月経困難症、過呼吸症候群、不定愁訴症候群などがある。これらの症候の多くが心身症といわれている。またこの時期の女性の中には、月経周期と何らかの関連を持って１～２週間の短い病期を毎月繰り返し、周期性精神病の病像をとるものもある。次に妊娠、分娩に伴う心身症としては、想像妊娠、妊娠悪阻、切迫流産、妊娠中毒症などがあげられる。また分娩後には産褥精神病が発現する。閉経期には女性の約半数に更年期障害といわれる様々な不定愁訴が見られるといわれ、またこの時期はうつ病の好発時期であるともされている。

この様に女性の一生において様々な心身症や身体の変調に伴う精神障害が発症し、それぞれが女性と身体性を考える上で興味深いが、ここでは特に摂食障害その中でも拒食症を取り上げ、この症候の患者達が抱えている身体性の問題と、サトルボディとの関連を考えてみたい。

３．拒食症とサトルボディ

摂食障害は思春期・青年期の女性に多く発症する心身症であり、近年大きな裾野の広がりを見せている。主たる症状として食行動の異常があげられ、拒食症（anorexia nervosa）と過食症（bulimia nervosa）という一見相反する症状及びその類縁症状を含む。このうち拒食症は、一般的に何ら身体的症状が認められないのにもかかわらず、食物を受けつけず、極度にやせていくことが第一

の臨床的特徴となっている。体重の減少に伴い、月経の停止、うぶ毛の発生、脈拍・血圧の低下、そのほか飢餓状態による様々な身体症状が発現し、重症の場合、死に至ることもある。この症候で特徴的なことは、このような身体状況にもかかわらず、驚くような過活動性を示し、やせ細った身体を決して認めようとはしないという点である。

病因については諸説あるが、実際に死に至ることがあるほどの食事の拒否からは、覆うべくもない身体への拒絶感が指摘されている。またこの症候が思春期・青年期の女性に好発することから、ここで拒否される身体が、単に身体というのではなく、女性としての身体であり、その背後に女性化への拒否が潜んでいるのではないかという説もしばしば論じられている。すなわち思春期に入ると、女性は乳房が発達し、初潮が訪れ、皮下脂肪がついて丸みを帯び、次第に女性らしい体型へと変わっていく。しかし拒食症の患者は、このような変化を拒み、食事を拒否することによって身体の発達を止め、少年のような中性的な存在に留まろうとする。ここに女性になることの拒否、肉体性に結びついた女性性の拒否があるのではないかと考えるのである。

これらの説の是非はともかくとして、拒食症の問題が、身体とそれに結びついた女性性に関連していることだけは確かなようである。それでは彼女達にとって問題となっている身体と女性性とは一体何なのであろうか。

Spignesi（1983）はHillman（1979）のいうupperworldとunderworldという観点[15]を基にして、拒食症における身体と女性性の問題についてのアプローチを試みている[16]。ここでいうupperworldとは、西洋の自然主義的世界観でとらえられた物質的世界であり、水平的な生のみを追求する世界である。それに対しunderworldとは、魂の世界であり、夢やあいまいさや死の世界である。Spignesiによるとupperworldでは女性は食物、身体、生殖に縛りつけられ、underworldへと心理的に旅することからさえぎられ、切り離されている。この長い間切り離されてきたunderworldからの滋養に飢えている女性が全ての人の中に（男性の心の中にも）存在すると彼女は述べている。そしてこの飢え

た女性を体現している、あるいはunderworldの存在を身体で示しつづけているのが拒食症の患者なのではないかというのが彼女の説である。このunderworldへの旅という言葉は、先に述べたDemetrakopoulosの「下へ向かっての超越」という表現を思い起こさせる。Demetrakopoulosはこの下へ向かっての超越が女性の心の発達にとって重要なものであると考えたが、Spignesiは拒食症の患者はこのような超越体験から切り離されてしまった女性のあり方を体現していると考えているのである。すなわちここで問題となっている身体は、私達にサトルボディへの接近をいざなうような身体ではなく、心と全く切り離されてしまった物質としての身体と、それに結びつけられた女性性であるといえる。

このような観点に関連して、Berry（1982）のギリシャ神話におけるエコーとヘラに関する記述についてここで触れてみたい[17]。Berryによると、ヘラは女王、統治者、意識の様式を統治するものであり、夫ゼウスと同様に物質の領域に関わるものである。彼女は事実、形式、秩序を好み、彼女にとって出来事は物事の社会的な秩序の中において事実として現実に起こらなくてはならない。ヘラは確立されたものに仕え、物事を確定したものにするように努める。つまりSpignesiのいうupperworldの支配者であるといえるだろう。それに対しエコーはもっと非現実的で実質のない、繊細で間接的な美のセンスの世界に関わるものである。Berryはこのヘラの平面的で水平的な世界に深みを与えるためには、エコーが必要とされると述べている。この論文では拒食症については触れられていないが、そこに記述されているエコーの姿—ナルシスへの愛に燃え上がり、その報われない愛の苦しみと苦痛の中で、彼女の身体はやせ衰えて、やつれてしわくちゃになり、うるおいは身体から空中へと消えてしまう。声と骨だけが残り、それから骨は石と化し、声だけが残る—は拒食症の患者の姿を髣髴とさせるものがある。

エコーは空気の中に消えてしまったがゆえにサトルボディとして空気の中に存在する。このようなイメージを追っていくと、拒食症の患者はサトルボディ

への接近から切り離されてしまっているがゆえに、その存在を否定的な形で体現している、あるいは体現させられていると考えられないだろうか。そしてそれはただ拒食症の患者のみの問題に留まらず、同じような問題を抱えた私達自身に突きつけられているメッセージであるようにも感じられる。

終わりに

女性とサトルボディとの関わりを、肯定的な面と否定的な面から述べてきた。女性にとっては身体からのサトルボディへの接近は（これはもちろん女性にのみ限定されるものではないが)、人生において大きな意味を持つと思われる。

拒食症の患者達が、受動的にサトルボディの世界に巻き込まれ、完全に死の世界へと取り込まれる前に、サトルボディとの繋がりを回復し、心と身体の両方の存在を回復していく道は、同時に私達すべてにとっても、いかに生きるかを考えるとき、やはり大切な道となるように思われる。

引用文献

1) 老松克博（2001）サトルボディのユング心理学　トランスビュー
2) Stevens, A.（1982）A Natural History of the Self. Routledge & Kegan Paul, London
3) C. G. Jung C. W. 8 Para. 437
4) C. G. Jung C. W. 9 Para. 392
5) Harding, M. E.（1971）Women's Mysteries: Ancient and Modern. C. G. Jung Formation for Analytical Psychology, Inc.（樋口和彦・武田憲道訳　1985　女性の神秘―月の女神と女性原理　創元社）
6) 小倉千加子（1988）セックス神話解体新書　学陽書房
7) Samuels, A., Shorter, B., & Plaut, F.（1986）A Clinical Dictionary of Jungian Analysis. Routledge
8) Demetrakopoulos, S.（1983）Listening to Our Bodies: The Rebirth of Feminine Wisdom. Bacon Press, Boston（横山貞子訳　1987　体の声に耳をすますと―よみがえる女の知恵　思想の科学社）
9) 池見酉次郎（1963）心療内科　中央公論社

10) 日本心身医学会（1970）心身症の治療方針　精神身体医学 10
11) 河合隼雄（1986）宗教と科学の接点　岩波書店
12) 河野博臣（1984）生活の中の心身症　明日香出版
13) 井上一正・河野博臣（1984）よく見られる心身症　生活の中の心身症　明日香出版
14) 野村純一（1977）女性の性腺機能と精神障害　現代のエスプリ別冊　現代人の断絶—性の断絶　至文堂
15) Hillman, J. (1979) The Dreams and the Underworld, Harper & Row Publishers
16) Spignesi, A. (1983) Starving Women: A Psychology of Anorexia Nervosa. Spring Publications, Inc.
17) Berry, P. (1982) Echo's Subtle Body: Contributions to an Archetypal Psychology. Spring Publications, Inc.

Summary

Subtle Body—Women and Body

Motoko Yamaguchi

Analytical psychologist C.G. Jung proposed the idea 'Subtle Body' which means intermediate area between psyche and body. It is the area not only between psyche and body but also beyond the both. In Jung's Psychoid Unconscious level, psychic world and physiological world cannot be distinguished. In this level, psyche and body are factors of one reality—Subtle Body. We can approach this invisible Subtle Body from psychic and physical channels.

Women experience various physical changes in their life cycle, for example the menarche, the delivery and the menopause, which influence their psyche. The facts point women have more chances to approach Subtle Body from the body side than men.

In the delivery and the lactation period, many women are said to have some transcendental experience downward. This experience seems deeply connected to Subtle Body, and also deeply influences their psychic development.

Women also have chances to fall many psychosomatic diseases in relation to changes of internal secretion in their life. Psychosomatic diseases are those which spread over psyche and body. These diseases show psyche and body cannot be separated easily. We can see in those diseases any problem of Subtle Body. Anorexia nervosa is a case in point. Anorexic patients seem to show that they are separated from Subtle Body and cannot have transcendental experience which is indispensable for our psychic development. The problem which anorexic patients show seems also the problem of ourselves today.